英米紙『それは承知してるが、現在では冒險といふものだ、若し失敗したら却つてお前の若しみを激化するのだ、もう少し辛棒して呉れ』

ソ紙『もう待ち切れぬ、即刻約束を實行して呉れ』

英米紙『お前は分り増い奴だ、一體お前は今更そんなことをいへた義理か？　そんなら何故俺の方がドイツと戰つて困つてゐた當時に、その背後に第二戰線を作らなかつた、その頃はお前は良い氣持で嘲笑してゐたではないか。これも皆お前自身の身から出た錆さ、餘り幅つたい口を叩かずジッと騷がず我慢して待つてろ』

大體以上のやうで、最初ソ聯紙が米英の不信を責め立て、單獨媾和等を示唆して半ば强迫的であつたのに、最後には米英が逆襲してソ聯の急所を衝いて積極的となり、主客顚倒してソ聯が受身になつてゐる點が頗る興味深いではないか。

米英・ソの本質的相剋面

このやうな泥試合に終始しつゝも、米英側もソ聯側もその現實政策から相互利用はどこまでも忘れぬは當然であり、從て依然表面上は或程度の協力が維持されたのである。やがて老獪な米英は遂に無謀にも飽くなき侵略の野望をむき出し、北阿方面に戰局を擴大し、これにより一は以てソ聯の不滿を抑へて所謂第二戰線の代用とする一方他は既に瀕死の狀態にも等しい無力な佛國の虚を衝いてその北阿領の侵略を開始したのであつた。

從つて米英側もこれを評して第二戰線といふには流石氣がとがめたとみえ、特に宣傳屋るルーズヴエルトすら〃小規模の第二戰線〃と評して自已の强盜癖をカムフラージュしてゐる。

註　北開問題もダルラン暗殺事件に絡み米英・ソの對立を表面化し、ドゴール、ジロー兩傀儡政權を絡る米英・ソの摩擦は注目される。前者はソ聯後者は米英の支持。

然しその戰局は相當大規模のものであり、米英の侵略主義を秘めてゐるとはいへこの際或程度獨軍の牽制には役立つてゐるところからスターリンも不精不性ながら〃所謂公約した第二戰線とはいへないが、行はぬに勝るものである〃と述べてゐる點は注目される。

以上の如く米英、ソの合作は僅にドイツ打倒といふ共通の現實的必要觀に基調するものであつて勿論そこには道義性等は微塵もなく、然もそのイデオロギーに於て、また世界觀に於て、一は自已を中心とした金權自由主義による世界制覇であり、一はプロレタリア的世界革命を窮極の目標とする赤色帝國の建設が主眼であつて見れば兩者は全く相容認し得ぬ根本的對立を潜在的に包藏してゐるのである。

從つてこの兩者の眞の一致若しくは合作は絶對在在し得るものではなく、或る段階に於て分裂崩壞の必至なることは多言を要せず、その兩立の如きは許されぬのである。

只目前にドイツといふ强大な共同の敵を有するために双方共相手方をより多く利用し、その一方的犧牲と消耗によつてドイツを倒さんと企圖してゐるものであり、ソ聯が獨・米英兩陣營の共倒れを狙へば、米英また獨・ソ兩國の崩壞を念願してゐるのである。

從つて米英の對ソ援助といひ、政策といふも自ら嚴たる限界を有し、最少限度の援助によつて抗戰力を繼ぎ、勿論ソ

聯の一方的勝利とならずドイツと共倒れに至るを期してゐるものである。

またソ聯も現在の赤軍の現狀を以て米英に最大限の恩を賣り、その負擔を一日も早く米英に轉換して危機の回避を企圖してゐるのである。

かくて米國が宿敵ソ聯と結んだ一事こそ今次大戰の複雜な相貌を性格づけるところであり、米ソの合作は米國自身の國內に於ても如何に紛々たる輿論を釀し、ヂレンマを暴露してゐるかは次の例でも明かである。

一九四二年四月ニューヨーク州議會のラップ・クーデル委員會は共產主義の脅威を指摘した報告書の中で次の如く述べてゐる。

『獨ソ戰勃發以來米國共產黨は米ソ提携を危殆に瀕せしめることを怖れて表面謹愼を裝つてゐた。その結果一部知識階級では米國では共產主義が永久に解決した如く誤信した。然し過去二十年間共產主義は米國に對する陰謀を逞したのである。米ソ共同戰線の結果はこれらの現象を一時的にカムフラージュされても共產主義の侵略は却つて熾烈化してゐるのである』

またエール大學教授スパイクマンは近著に於て

『ドイツが歐洲を征服し、ウラルから北歐までの全地域に覇を唱へる場合よりソ聯がウラルから北歐までの歐洲を制覇する場合の方が米英に取つて危險である』

としてその具體的說明を行つてゐる。

一方一九四二年五月二十一日ニューヨーク・タイムス紙の社說に於て

『赤軍はデモクラシー擁護のため戰つてるのではない、只現在赤軍はデモクラシーの生き得る唯一の世界を防禦して戰つてゐるのであるから、この點に於てのみ吾等は彼を援助せねばならぬのだ』

また十月五日の同紙上でも

『米英がドイツを叩くとすれば、それはスターリンのためではなく、米英自身のためである』

と述べ更にワシントン・ポスト紙も

『第二戰線を展開せよといふ煽動は米英聯合國に取つて最も有害である、それは米國の手でデモクラシーを顚覆せしめんとする共產主義者の謀略である』

と痛烈に論じ、米英、ソ關係の眞相を暴露してゐる。

事實三國同盟成立後モスクワに設置された米英ソ軍事會議は何等の活動もせず、またワシントンに於ての聯合國側の戰略と作戰を協議する共同參謀總長委員會には米英側軍事代表のみ參加協議して、ソ聯側は全く一顧もされずその樞機に參加することは許されないのである。

そして僅に支那その他の亡命國と並んでその必要に應じ諮問され、或はオブザーバー程度の出席を特許される狀態で全く除外されてゐるに等しいのである。

さればスターリンも報復的に駐ソ米英軍事委員の現他（獨ソ戰）視察の要求をも頑として拒否し續け、ロンドン・ニューブニング・ニュース紙もこの間の事情を

『ソ聯は奇怪にも米英に對し軍事に關する重要情報の提供を拒否してる』

と述べ、米英、ソの疑心暗鬼の狀態を暴露したのである。

これを要するに米英ソ合作の基調は飽く迄現實政策に存し、その內面には拂拭し難い相剋面を伏在してゐるのであり理論上からはその完全な提携は全く望まれぬ本質的脆弱部門を潜めてゐるのである。

さればその合作も或る段階に於ては遂に崩壞することは必至であり、この結果再び對立の狀態に還元して、その本然の姿を示すであらうことも想像に難くない。然しその時機を速急に期待する事は困難であろう。

そして僅に、米英・ソ關係分裂の時期としては相手方の一方が他方を利用するの必要を失つたのであり、從つて戰局の進展とは必然的に最も密接な聯關を有してゐるのである。

第五章　東亞及び西亞政策

次に東亞方面に於てみるにソ聯の西亞を通じての對印工作は漸く活發となり、特に英國の敗戰に伴ひ印度獨立氣運に乘じてのソ聯の暗躍は目覺しいものがある。

今やソ聯は歐露に於て失つた所を西亞及び印度に於てこれを補はんとするであらうことは當然豫想さたる所である。

註　ソ聯は印度の動向に對し最も深甚な注目をなしてゐるが、過般來印度にソヴニート友の會を新設したり領事館を增設したり或はタス通信社支局を全印百餘ヶ所の重要都市に新設した。かくて印度大衆の獲得と赤化をも狙ふ一方ネールその他の親ソ派要人と密接に接觸し反英暴動を煽動し英國の遺產相續者として萬全の準備を行つてゐる。

然るに同盟國である〃氣味惡い隣人〃ソ聯が印度に觸手を伸し、或は獨立運動を支援しこれを激化せしめてゐる事實はさなきだに微妙な關係を示してゐる英ソの立場を更に複雜化せしむるものであり。さればこそ英國は苦肉の策としてかねて印度に多大の關心を有してゐた米國の勢力をこの方面に誘引し、ソ聯を牽制せしめんと企圖したのである。

そしてルーズヴエルトの私的代表フイリツプスが一九四二年十二月印度に到着し、既にこの方面に進駐した米軍約八萬の實權を把握するに及び、ソ聯は

〃印度に關して深甚の關心を持たざるを得ない〃

と公式聲明を發し、軍隊こそ入れぬが、凡ゆる方法を以て赤色勢力の扶植と民心把握のため政治工作員を續々入印せしめてゐるのである。

かくして哀れにも印度人の血の叫びたる

〃印度人の印度〃

は今や無殘にも米・英・ソ三國による帝國主義の角逐場と化し、凡そ印度人の志向とは背反する方向へ押し流さんとしてゐるのである。

即ち今次大戰に於て連敗にもかゝはらずソ聯は飽く迄西亞印度への南下政策を固守し、是が非でもこの方面の希求を

貫徹せんとしてゐる現段階に於て、またこれを防止せんとする米英の企圖とは必ずや近き將來摩擦を暴露するであらうことは必至である。

西亞を舞臺とする米英ソの確執

以上の如く只米ソの勢力の侵入を或る程度印度方面に於て許容した英國の肚裏は米國の實力によつて印度の離反を喰止めんとする一方、ソ聯の勢力を誘引して米ソを相互に牽制せしめ、その間に漁夫の利を狙つたものであり、更に深くは若し將來印度の離反必至となれば、その犧牲に於て、ソ聯の勢力とやがて進展し來ると彼が想像する日本の勢力を印度を舞臺として衝突せしめんとしてゐるのである。

ソ聯側もかゝる陰謀は百も承知であらうしのが今日の狀態であらう。

この際米國の存在こそ注目すべきである。

印度をしつかり把握せんと必死の努力を試みてる

支那への態度

更にソ聯の對支態度であるが、蔣をして日本の失面に驅り立てたものこそはたる東亞共榮圈の確立を最も嫌惡

從つて一九四〇年四月二十五日は郭泰祺駐英支那大使が

『ソ聯の援助は他の凡ての國の總和より大であり、支那の眞の友はソ聯を措いて他になし』

と述べてゐる一點からしても從來ソ聯の對支援助が陰陽に亘り如何に大幅なものであり、効果的であつたかゝ判明する。

即ち支那をして抗戰を繼續せしめ日本を牽制したものであり、更にその裏面に於てはこの間に中國共產黨の勢力を增大助長せしめて支那の全面的赤化をも狙つたのであつた。

從つて大東亞戰勃發後と雖もこの對支態度に些の變化なきは勿論であるが、只歐露に決戰を展開してる現在に於てはその對支援助も必然的にその規模に於ける縮少は已むを得ざるところであり、これを以てソ聯の對支態度が本質的に改變され、この結果一轉して親日動向への趨移といふが如き甘い推定をしたら正に危險極まるものといふべきである。

外交の行手

以上ソ聯の今後の對外政策を要約すれば、今後依然戰局の進展に左右され、この結果はなほ或程度の日和見的追隨を事とせねばならぬ事は不可避のものと云はねばならぬ。

かくて今後のソ聯の前には二つの途が岐れ一は國際赤色陣營の支持を恃んで公然資本主義國との鬪爭に轉ずるか、或はその反對に國際赤色陣營即ち米英等一聯の民主主義諸國に於ける勞働者運動の發展を或程度の限界に抑壓することによつて、これら米英の支配國との協調を維持するか二者何れかの一途を選擇せねばならぬ羽目となつたのである。

然も前者を選ばんか同盟國を失ひ、後者を選べば國際勞働運動の支柱を喪失する結果となり、その何れもがソ聯に取つて致命的であるだけにヂレムマに陷るものといはねばならぬ。註＝一九四三年五月獨逸の夏期攻勢を前にして頗る困難な國際政局に直面するや現實家のスターリンは果然米英との提携こそ最も必要なりと斷じてイデオロギーは一切引き込め、途に第三インターの組織を解散する措置にでた。

ソ聯としてはなほ當分その現實的、打算的立場からその限界に達するまではこれら二者の調整に凡ゆる努力を注ぐであらうが、現在の比重は米英との協調維持により大なるが如くに見受けられるのである。

即ちこゝで過去僅々一、二年間のソ聯の對外政策の變轉振りを回顧すれば、先ず獨ソ協定以來のソ聯の態度は一九三二年以來のソ波不可侵條約を蹂躙し、次で十一月には何の理由もなくその實力に物を云はせて翌六月及七月に亘つて沿バルト三國を手中に收め、更に息つく暇もなく羅領ベッサラビア、北部ブコヴィナと強引な割讓奪取を行ひ、この結果は一九四〇年前までは尙或程度ソ聯に取つて與國乃至緩衝國として扱ひ得た諸國を次

對獨協調を破るに至つたのであるが、これら一聯の帝國主義

は一八二〇年以來常に口にした對外平和政策、特に一九三二年以降の集團保障政策の完全な放棄蹂躙であり、

革命に於て基調とする諸民族の自決權擁護と帝國主義的侵略に對する被壓迫弱小諸民族の獨立支持の原則

劃期的示向が窺はれるのである。

然し右一聯の領土

國內的には外交の勝利として謳歌され、實際に過去數世紀の間に於て不斷にその實現を希求して已まぬ國民的宿願たる——歷代の帝王(ツァー)によつて幾度か試みられ、然も到達され得なかつた——懸案がスターリンによつて一兵も損せずして、いとも易々と實行され、多年の夢を實現し得たソ聯國民の歡喜とスターリンへの畏敬の念は蓋し想像に餘るものがあつた。

そして疑ひもなくかゝるソ聯の成功は今日に於ける國民的强烈なスターリン信望の有力な原因の一として數へられるものである。

スラブをして彼等が本能的に威怖して已まぬ獨逸(ネメツキー)と對等の地位まで向上せしめたスターリン、そしてドイツと同一水準に於て然もドイツとは違つて一兵も捐せずしてソ聯の領土擴大を實現し得たスターリンに對しては高度の英雄崇拜主義のロシア人は熱狂的信賴の誠を披瀝したのである。

特にソウイエート政權を仇敵しする白系露人に於てすらスターリン賞讃の聲が聞かれたのである。

この故に〝スターリンを偉大ならしめたものは實にドイツである〟とすらいへるのである。

然もこの正に赫々たる一聯の外交的成功の裏面を　れてはならない。

即ちスターリンの國内的絶對の信望に反し對外的にはヨーロッパ諸小國、否全世界の弱小國の對ソ信頼の念はこの結果當然著しく失墜し、然も芬蘭、波蘭、羅馬尼、沿バルト諸國等の被侵略國は今日に於て苛烈な憎しみを以てソ聯に敵對するに至つたのである。

かくて獨ソ關係が漸く惡化し、更に開戰するに及び、これに狼狽したソ聯の對外政策は文字通り大混亂に陥つたのは云ふ迄もあるまい。

イ、對米英接近

ロ、獨軍進駐直前にユーゴーの不可侵條約締結

ハ、トルコとの不可侵條約の再確認

ニ、白、蘭、ユーゴ、ギリシヤ、ポーランド等の在ロンドン亡命諸政府との外交の復活と相互援助條約の締結

ホ、イランに進駐した事實

以上の如く昨日まで敵視して已まなかつた米英佛との協調、そして特に自らの手で壓殺否認し去つた弱小亡命國との今日に於ける外交關係の再復活等一聯の不體裁なそして無節操な事實こそは、未だ獨自の途を歩むべく餘りにも弱いそして無力な現實のソ聯の一部の姿を期せずして暴露したものである。

然し對獨協調破綻を前に依然東亞ソ聯の靜謐が保障されてゐる點は失政に次ぐ失政のスターリン外交に取つて特筆すべき成功の金字塔を樹立したものといはねばならぬ。

とまれ赤色外交の示向は今後戰局の推移と共に更に幾變轉し、更に多難の途を辿るであらうことは過去の足跡に兆しても極めて明白であり、吾等はこれに對し十分の關心と警戒を怠らぬところである。

第六章　敗戰と國内態勢

赤軍の抗戰意慾

對獨敗戰一ケ年に於ける赤色外交の混亂に伴ひコムミンテルンもその政策に必然的に夥しい矛盾と混亂を露呈したのであるが、國内問題に關する限りはスターリンの統制下に目下のとろろ黨は一糸亂れぬ組織による活動を示し、底知れぬ强靱な抗戰力を確保してゐることは正に世紀の奇蹟といはねばならない。

既述の如く赤軍の指導層は悉くスターリンの狂刄に斃れてより、日なほ淺く、また赤軍部門内に於てもその統帥力の貧弱さ、作戰頭腦の劣惡さは現在赤軍幹部級の顔觸を一わたり眺めただけでもうなづかれる筈なのに、連戰に次ぐ敗戰を以てしてもなほ熾烈な反撃力の要素は一體何處に求むべきであらう。

先づその解明によつて今後の獨ソ戰否今次大戰の趨移を窺いてみよう。

奇蹟的に强靱な抗戰力の本質的なものとしては先づスラブ族の徹底した鈍重さであり、下等動物のそれにも比すべき

愚鈍無神經さと更に或種の諦觀が指摘出來るのである。

從つて敏捷な機動力、そして精細な機械力にのみ依存する時は容易にその缺陷を暴露するが、一度守備について戰つたら飽くまで困苦缺乏に耐える忍耐强さと、高度の服從心に富む民族性と〝ニツチエーウオー〟（已むなし！）によつて表現される民族的諦觀によつて死また已むなしとする不思議な精神力が生れて來るのである。

これは近代科學戰に於てすら應々にして機械力を壓倒しての勝利を占め得るのである。

この事は正に唯物主義を捧ずるソ聯に於ては大なる奇怪事であり、矛盾である。

即ち今次戰鬪に於て屢々その例を見るところであるが、獨軍の精巧緻密且つ强大な攻擊力によつて全く絶體絶命の淵に投げ込まれつゝも、なほ執拗に抗戰し、最後に大刀を振つて獨軍戰車に双向ふコサック兵、鋤を振つて反擊する農民ゲリラ部隊の姿は枚擧に遑なく、從つて獨ソ兩軍司令官の話合ひによる降伏交渉の取り決め等は未だ一度もないことはこの戰爭を最も特長づけるものである。

然しこれら赤軍の偉大な守備力も單にスラブ民族性に總てを歸する譯にはゆかぬのであつて、他の理由として特殊な赤軍組織を指摘せねばならない。

即ちそれは政治委員（コムミサール）制度であり、ゲ・ペ・ウによる督戰である。

そして赤軍の戰陣訓には

イ、最後の彈丸は自らのため保存せよ、生きて敵の手に捕虜となる勿れ

ロ、短期間に回復の見込みある輕傷者のみ救出し重傷者や見込なき者は退却の際必ず射殺せよと明記されてゐるのである。

赤軍の獸的强靱な生存力

一方この間の事情に關し獨軍將校は〝東部戰線十戒〟なる手記に於て次の如く述べてゐる。

イ、獵師たれ

高度に發達せるソ聯兵の本能　天候や地勢に對する赤軍の無感覺は獨軍を敵としても最大の有利な點である。

このためにはドイツ兵も獵師となつて山を腹這ひ、晝夜を分たず四季を通じて耳と目を働かせねばならぬ。

ロ、即興詩人たれ

彼等はグライダーの上から突如大砲の彈をぶち落す、或は鹵獲兵器を即座に自分で手際よく使ひこなす（決して赤軍は不器用ではない）河は筏を組んで渡り、移動式宿舍を造り凡てが突嗟の間に思ひ付きによつて處理される。

ハ、極度に勤勉なれ

赤軍の突擊のない日は一日もない、天候の如何を問はず執拗に拠戰し、また陣地を構築する。

ニ、猜疑心を持て

赤軍は殆ど共產主義者である、俘虜に對し住民に對して心を許してはならぬ。

ホ、何時も目覺めてゐよ

赤軍は夜の闇か霧を冒して必ず襲擊して來る、以てソ聯兵の一人々々の徹底した强さと良さを指摘してゐる。

然も赤軍は數的に殆ど無限であり、他の資本主義國家とは異り前述の如く戰陣に於てはその一命は文字通り一顧もされぬ輕さであり、この點むしろ獸類のそれと比すべきである。

〝精神に於て、また觀念に於て素より全く本質的に異るものであり、これとは比すべくもないが、然もなほ赤軍兵子の身命が獸類の如く全然顧みられてゐない點は世界的恐威である。

またその給與の如きも列强中その類例をみぬ程の言語に絶した劣惡さで（重慶軍とすら比較にならぬ）然もその補給の斷絶勝ちな狀況下にも良く耐え得る獸的生存力の汪勢さは吾等の想像に絶するものがある。

されば去年戰線を巡視したウイルキー米大統領特使も流石にこの赤軍の悲慘且つ劣惡な戰陣生活を直視し得ず〝この狀態が若し米軍であつたら、彼等は即時戰鬪を中止するであらう〝と本音を吐かしめたのである。

然もこれらの熾烈强靱な精神力と肉體力は何れも平素極めて粗惡な糧食の下に、劣惡な生活樣式に甘んじ且つ嚴格峻烈なスターリン的指導によつて培はれた賜である點を忘れてはならぬのである。即ち彼等には自由を憧れ樣にも自由といふ事を知らぬのである。

彼等赤軍はかゝる狀態に於て、適當な指導者さえあれば凡ゆる苦難に耐えて只默々として抗戰を繼續するであらうことは充分豫想されるのである、實にスターリンの强烈な指導力といふべきである。

銃後の戰時色

同樣の事實は赤軍抗戰力の推進的役目を負ふ經濟方面に於ても指摘し得るのである。

即ち過去一年半の連戰によつて、歐露の大半を喪失した結果抗戰力培養の重要地帶は悉く失陷したのであるが、今なほ熾烈な抗戰を展開し得る尨大な近代兵器を戰線に繰り出してゐるのである。

現在獨伊の占領地域によつて、ソ聯は極めて內輪に計算して軍需品生產力の六割は喪失した筈であるのに依然として今日の如き組織的且な機械力を以てする反擊を續けてゐる點は何といつても一の謎でなければならぬのである。

獨軍もその公表に於て

〝ソ聯機械兵器はその大半を破碎され、更にその生產力も過半數は破壞された筈の今日に於ては、その使用兵器は當然米英製のものと推定してゐたが、鹵獲して見るとその何れもが依然ソ聯製である〝

と素直に述べてゐる。

右の如く凡ゆる生產力が既に喪失した筈のソ聯に於てなほ不斷の消耗に對して次々と新たな火砲、タンク、飛行機等の新式兵器が補給されてゐるのは何故であらう。

吾々は緖戰に於ける絢爛たる獨軍の大戰果によつて戰前常識的に推定されてゐた赤軍の機械力は殆ど壞滅去つたものと豫想したのであるのに、なほ今日の無限に等しい武器の補給力の存在するを知つて、今更乍らその底知れぬ强大な生

産力に一驚するところである。

この事實は戰前に於て、既に從來最も弱點とされた生産配置の不均衡が是正されてゐた事を示すものであり、即ち國境方面に偏在する國防上危險な生産地帶に代つて安全な工業地帶が豫ねて奥地に新設されてゐた事實を物語るものである。

軍需工場の奥地移轉

敵の攻擊を避けるため軍需工場の後退分散は今次大戰の特長であり、ソ聯に於ては早くから特にこの點に充分の對策が行はれてゐたのであつて東方に隱密裡に大工業基地が建設されてゐたゝめ今日に於ても相當の工業力を維持し得るに至つてゐる事は否めぬ事實である。

然しこれらは夙に工業力の偏在是正を行つてゐたが故に可能であつたのであり、對獨戰後の移轉はしかく簡單にはゆかないのであらう。

即ち大工場の移轉に伴ひ、その前提として第一にこのためには人員不足があり、次に物資の（食料）不足が解決されねはならぬのである。

ソ聯紙は工場移轉の成功に就き

〃占領地區の我が軍需工場を利用せんとした獨逸軍の目論見は瓦餅に歸した。これはソ聯政府が適時に國家に取つて缺くべからざる凡ての工場を既に奥地深く移轉せしめたが故である〃

と述べてゐるが、兵火を避けての大工場の遠方への移轉、そして再び新な生産を開始して移轉前の生産を維持しようとする事は平時に於ても頗る困難であり、まして戰時に於ては人的、物的不足に加へ、現地工場との相剋も當然考慮されるところでめり、短期間に於ては極はめて至難の業と云はねばならぬ。

從て工場移轉はソ聯側の發表の如く大成功とは絶對云ひ難いのであるが、然しその反面また不成功であつたとも云へないのである。

この間の事情を示唆するものとしてクイウイシエフ發の（一九四二年十二月二十日）同盟電によれば

チエリアビンスクに新發電所が建設され、五萬キロのタービンが五十日の短期間で完成した旨を傳へ、又ブラウダ紙はウラル地帶各地に最近續々發電所が新設されて西方から移轉せる各種大小軍需工場に動力を供給し、この方面に於ける生産力は既に歐露に於て喪失したものを完分カバーしてゐる旨述べてゐるが、これはソ聯一流の宣傳として幾分割引するとしても、或る程度の成功は否めぬところである。

なほこゝで戰前ソ聯の工業生産が如何に歐露に集中されてゐたかを物語るものとして一九四〇年末現在のモスクワ市に於ける主要重工業關係の工場を一瞥すると次の如く多數に上つてゐるのを知るのである。

一、モロトフ記念金屬製煉第四一工場、モスクワ金屬壓延第四二工場、クラスヌイ・ブロック起重機工場、ボトヨモニク起重機工場、ストロイブロカトメ・ニザツイヤ修繕工場、カリーニン記念機械製造工場、コムブレソル工場、クラスヌイ・フアケル機械製作工場、ボレツ機械製造工場、シアリコボドンブニツク第二號工場、カガノウイツチ記念ボールベアリング工場、モスクワ自動車工場、モスクワ計算機タイプライター工場、モスクワ機械修繕第一工場、ロストキ

ンスキー工場、鍛裝第一號工場、モスクワ州所屬及びトラスト所屬機械修繕工場、クラスヌイ・プロレタリー機臺工場、サモトオチカ工場、オルジョニキーゼ記念自動機臺工場、スタンコリト工場、モスクワ機械第二號工場、モスクワ中央實驗工場、チチエリン記念第八號工場、モスクワ第六號機械製作工場、五月一日記念鑄物機械工場、モスクワ第一號機械製造工場、クラスヌイ・メタリスト機械製造工場、モスクワ印刷組合所屬機械工場、カリーニン記念機械製造第一號工場、クラスヌイ・プウチ鑄物機械第十四號工場、十月革命十三周年記念金屬工場、十月革命七周年記念國營製紙トラスト工場、ブハーリン工場、ブレスネンスキ機械第三號工場、機械製造組合所屬第七號機械工場、同第十號實驗工場、トランスミツシヤ鑄物機械製造工場、ステクマシン機械鑄造工場、モスクワ毛皮綜合工場所屬機械製造第六號工場、同實驗工場、イゾリト工場、コメガ・ボイラー工場、コトルタービン・リユミノフスキー設計組立分工場、バロストロイ工場

一、ダイナモ工場、レブセ記念電氣モーター工場、モスクワ電氣工場、變壓器第二號工場、エレクトルブロウオド工場、モスエレメント工場、オルジョニキーゼ記念工場、モスクワ・レントゲン工場、エレクトロスヴエトフイツチング工場、エレクトロブロム工場、無線第二號工場、同第三號工場、電信電話器具工場、プロフスビヤジ第四號工場、ザテム精密電氣技術工場、ラジオ・ブリボール工場、ブロジエクトオル工場、

一、電氣イズメリーチエリ工場、インドウストリアリザツイユ紙記念アヴイオブリボオル工場、プラチノブリボオル工場、ラボルメチズ第一號工場、トチズメリチエリ工場、メトロン工場、ゲオデジヤ工場、ゲオフイジカ工場、モスクワ第一時計工場、同第二時計工場、ヂエルジンスキー記念計器工場、特殊實驗工場、ラモ實驗醫學機械工場、DSM計器ミシン工場、秤器具工場、フイズブクボオル物理用具工場、ロスメトロヴエス秤修理機械工場、セマシコ記念國立中央整形外科醫療用具工場、メムカズ電氣機械及び映寫機械工場、

一、一九〇五年革命記念車輛修繕工場、ウオイトウイチ記念車輛修繕工場、モスクワ第一造船所、同船舶修理所、ブレーキ工場、テツミツト轉轍工場、カガノウイツチ記念ソコリニキイ車輛製造及び修繕工場、ルズタク記念第一運輸機械工場、クラスヌイ・ボガツイリ護莫工場、カウチウク護莫工場、同再製工場、第六十一スターリン記念第一自動車工場、キム記念自動車組立工場、消火機械第六工場、自動車修理第二工場、アレムク自動車修理工場、ブヂョンヌイ記念機械工場、レソラ工場、スパルタク自動車部分品修理工場、ルイコフ記念工場、第四スターリン記念第一工場、同第六十二工場、モスクワ第一自動車修理工場、同第二工場、アレムクズ自動車修理及び車體製造工場

一、V・T・Y第百火力發電所、スミドウイツチ記念第一モスクワ國立第六五六發電所、電車供給第二モスクワ國立第六五七發電所、クラスナヤ・プレスニヤ第二地方火力中央發電所、モスクワ麥酒釀造工場發電所、シヤバロフスク麥酒釀造工場發電所、精糖工場第六六一發電所、シチエルバコフ記念絹織及び仕上工場第六六二發電所、クラスナヤローザ絹織及び仕上工場第六六三發電所、アレクセーエフ記念羅紗工場發電所、ロストキン毛染色及び仕上工場發電所、マルコフ記念紡織工場第六六六發電所、モスクワ市水道發電所、スウエドロフ記念更紗捺染及び染色工場第六六八發電所、モスクワ第一更紗捺染工場發電所、ゼルジンスキー記念藥劑工場第六七〇發電所、ウオイコフ記念化學工場第六七一發電所、モスエレトリツク電機工場發電所、ゼルジンスギー記念機械工場發電所、コメガ・ボイラー、瓦斯機械工場發電所、クツソフ記念工場學校第六七五發電所、カリーニン記念第三機械製造工場發電所、モスクワ河紡績工場第六七八發電所、モスクワ・クルスク鐵道驛第七九發電所、スターリンスク火力中央發電所、VII火力中央發電所、第一モスクワ火力中央發電所

一、カリブル度量衡器工場、エロフ記念鑄製造工場、モスクワ器具製造第三一工場、同第三二工場、プロワヤ・テフニカ工場、カリーニン記念切截器製造工場、テプロエレクトリク第三工場、鑽孔機製造工場、マレンコフ記念鑄鐵機具製造工場、鑄鐵機器製造第四七工場、同第四八工場、同第四九工場、マノモメトル機器製造工場、ウオイコフ記念煖房具製造工場、ウエンチリヤトル第二工場、モスクワ第一機械工場、スプリンケル機械工場、第四國營機械工場、メタロラップ工場、第五金屬打割工場、第十クラスヌイ、シュタンボフレチク工場、プレス打割第九工場、イスクラ金屬工場、第三安全剃刀製造工場、針及び留針製造工場、第一打刻七三工場、第十八ナルピトフスキー・プリトイ工場、メタロタラ金屬容器工場、バンツイリ寢臺製造工場、エクスプレス打刻工場、スクウオルツオフ・ステパスノスチ・トラストモスクワ支部工場、メタロルカフ工場、アグネトウシイチリ工場、第二金屬打刻工場、TMO金屬延壓工場、フセフトルグヌトロイ機械工場

一、フルンゼ記念化學工場、ウオクコフ記念化學工場、クラスノブレニ・ラツク染料工場、ウオロシーロフ記念有機半製品及び染料科學研究所、プチルスキーアテリン染工場、フルンゼ記念ドロゴミロフスキー化學工場、スターリン記念デルベネフスキー化學工場、三月八日記念化學藥品工場、セマシコ記念第十二化學藥品工場、アルカロイド第二九工場、サルチル酸工場

一、第三十雪花石膏工場、第一煉瓦工場、同第二工場、同第三工場、同第四工場、ドロゴミルセメント石灰工場、鑛滓コンクリート工場第三號、同第四號工場、同第五號工場、同第七號工場、同第八號工場、モスクワ州製紙トラスト所屬壁紙工場、オクチヤブリ紙着色工場、第二活字鑄造所、同木版、印刷用具工場、メツオ・チント印刷工場、モスクワ國營圖書出版合同所屬製本機械工場、タス印刷工場、全聯邦製圖トラスト所屬第二製圖工場、プラウダ綜合工場、オグニヨーク書籍雜誌印刷工場、モスクワ第二着色工場

一、ポチヨ記念ギター第七號工場、五ケ年計畫オクチヤブリヤ錄音機工場、寫眞乾板第一號工場、同第二號工場、映畫修整電氣工學工場、ゲ・ペ・ウ記念光學工場、オクチヤブリ映畫工場、モスクワフイルム工場、光化學第三工場、第二映畫工場、キノ・フロニカ工場、ヂアホト第七號工場、ウチオポチカ第六號工場、フユーズ・エレクトロプリポール第四號工場、實驗科學用品綜合工場、第三十四樂器工場

一、デトスコエ・トウルチエヴク玩具工場、油添布裝飾工場、モスクワ第三七獵銃工場、プロレタリア觀光團クルイレンコ記念工場、デトスキー・ミル玩具工場、プロレクリア觀光團第三號工場、クラシン記念サコース文房具工場、クラスヌイフドオジユク工場、カール・リーブクネヒト記念文房具工場、サワコ・ヴアンセツチ記念文房具工場、クラシン記念鉛筆工場、中央科學研究所模型製作所

戰爭至上主義

〝凡てのものを戰爭のために〟

のスローガンの下に

凡ゆる民需を犧牲にしてその精力は專ら軍需生產力一點に結集され、然も他の資本主義國とは異つて個人的利益や採算が些も考慮されることなく、只國家的要請の前に生產地帶の新設、移轉が極めて容易に斷行出來得る事はソ聯のみの

有する强味として忘れてはならない。

かくて開戰に備へ數年前から既に危險な國境地帶を避けて軍需生産地帶は夙に大半奥地に建設されてゐたものであり、また戰爭以來も引續きこれが行はれてゐたため、既に獨軍の占領せる時にはその工場地帶は何の生産的役割も果し得ぬまでに取り拂はれ、または破壞せられてゐた事も事實である。

これを要するに奥地に於けるソ聯の抗戰經濟力は（一九四三年の冬期反抗戰で南露一帶その他の奪還に成功してゐるが）なは相當程度に評價さるべきものであり、然も今後更に組織化し、强力化するものとみねばならぬのであり、物的抗戰力はむしろ今後東方基地の整備によつて一時よりはむしろ强化する可能性すら認められるのである。

第七章　スターリン政權はどうなる

動員し盡された人的物的資源

連戰にもかゝはらず赤軍は今なほ熾烈な反擊力を示し、軍需生産力またその消耗を或程度補給してゐるが、然し國內問題が果して今後長期の抗戰に耐え得るであらうか。

前述の如く今やソ聯に於ては人も物も極度に動員され、特に從來既に資本主義諸國とは異り人的豫備資源（失業者及び民需生産力）の一切を擧げて組織的戰時體制化を斷行してゐたことゝて、今後は人的物的兩部門に於て更に新な餘剩力を捻出することは絶對不可能であり、從つて國民生活は一層窮屈を增大するは當然である。

そしてこの事も國家の强權による完全な統制下に於ては今後なほソ聯國民は所謂〃勝つため〃に忍從するであらう。

反獨意識と祖國愛がスターリン政權の支柱

それにもかゝはらずなは敗戰が深刻に國內組織にまで浸み込み、厭戰氣運を醸成し、またこの結果ソ聯の癌たる少數民族に對する從來の態度が改變され、漸次强壓的政策に移行するに至れば、こゝに反ソ的色彩を示すに至るであらうことも豫想される。

だが未だ今日のところではスターリンの適切な政策が奏功して國民的熾烈な反獨抗爭意識を燃え上らせ＝例へば一般非武裝住民を故意に戰線に殘置することによつてこれに對し獨軍の攻擊を不可避とする等の方法＝ることに成功し、かくて當初ヒトラーが企圖したボルシエウイキ政權打倒の宣言も止むなく全ソ聯人を攻擊の對象となさしむる結果に導いたゝめ、現在に於ては反ソ機運より反獨意識が極めて根强く、これと共に祖國愛が昂揚されて、國內結束は今の所頗る强化されてゐるのである。

獨ソ戰

從つて今後獨ソ戰がソ聯側の意志によつて終了するとすれば少くとも次の諸條件の一または二つ以上の結合が實現された場合であらう。

一、今後の抗戰によつて國内に全面的反ソ氣運が擡頭するに至る場合

二、抗戰を繼續しても只物的人的に尨大な犧牲を積み重ねるのみで勝利への見込がつかぬ場合

一、ソ聯一國に於ては勿論米英の聯合勢力によつても近き將來に於てドイツを打倒することが不可能な場合

一、米英との對立が漸く激化し、米英の對ソ援助も到底期待出來なくなり、この結果は米英のため犧牲となつてドイツの矢面に立たされてゐる愚を悟つた場合

即ち無用な抗戰による戰力の消耗を避け、一時聯合國陣營から脫落して、戰火から遠ざかり、徐ろにウラル以東に退き國内の政治、經濟、軍事を再組織し、再建を企圖する一方この間にコムミンテルンを縱橫に驅使して、死鬪する交戰國の間隙に乘じて赤色革命の溫床を育成し、その疲弊に際して、その培養した再建の兵力と共に一擧に攻勢に轉じ世界赤化の野望を果さんとするの措置に出るやも知れぬのである。

對米英態度は徹底した猜疑心と不斷の警戒

ソ聯は米英の對ソ態度の正確な把握のためには常に表裏に亙る凡ゆる努力を注ぎ、特に昨年五月の〃ヘス事件〃に就ては執拗な關心を示し、ルドルフ・ヘスの刑罰を最も强硬に要求する一方、萬一にも英國がヘスを利用して對獨和平を企圖することを懸念し、更にこの結果これを轉起として全面的反ソ十字軍への進展を不斷に警戒してるのである。

また同樣に米國の動向に對しても充分の關心を注いでゐる。

即ち傳へられるが如くソ聯が法王廳への特使派遣のため工作してゐるが如きは（事實開戰以來國民の協力を求めて宗教抹殺政策を放棄した）明かに一面に今後の世界情勢の變轉期に際してその國際的布陣に於て他國に遲れを取らぬための萬全の措置とみるべきである。

また凡ゆる損害をも省みぬ執拗極まるスターリングラードの奪還は單に同地が曾てボルシェウイキ政權確立のメッカであり、更にコーカサス、南露、モスクワへの連絡の要衝として戰略上最重要地點でもあるが、それ以上その失陷が國民的抗戰的意識の低下を來すためのみならず、更にこの强烈な抵抗によつて一は世界に對し、特に米英に對して赤軍抗戰力の餘裕を示すための或種の掛引でもあり一面に於てはこの戰鬪に世界の關心を集めつゝもその裏面に於て最後的大轉換＝＝の工作を行はんとする深い意圖が潛められてゐるとも見られるのである。

註　チエモシエンコ元帥は北部戰線司令官に轉じ、現在スターリングラード方面新指揮官は新進のロジムツエフ將軍である。

「樞軸か聯合國かの何れかの陣營に分れて血みどろの死鬪を展開してゐる世界大動亂の現段階に於て獨りなほ戰火の外に立つバーチカン市、この故にこそ奇怪にも

イタリア帝國の旗の下に相激鬪する二陣營の外交官がこゝに於ては銃砲火こそ交えぬが烈しき外交制覇の目に見えぬ鬪爭を續けてゐるのである。

即ちバーチカン市は一九二九年二月十一日イタリアとの間に結ばれたラテラン條約によつて、その特殊性が法的に世界に確認されたのである。

面積四十四町歩、主權者たるピオ十二世法王以下文武官住民外國使臣等合して一九四一年末現在で僅か九百十名であるが、事實はその背後の世界各地に於ける三億六千萬のカトリック信者を支柱としてゐる一大法城なのである。

現在こゝに使臣を派遣してゐる國家は原田公使を駐劄せしめてゐる日本を始め獨（伊）芬、スペイン、佛等の樞軸陣營と英米、波、ユーゴ、ブラジル、ペルー、ボリビア、コロムビア、キユーバー、ウルガイ、エクアドル、ヴエネズエラ、重慶等の聯合國側の代表が吳越同舟の入り亂れて駐在し熾烈な外交戰に日夜火花を散らしてゐるのである。

（在法王廳重慶公使謝壽康は一九四三年一月二十六日着任す）

スターリンの肚の裡

以上を以て建國二十六年今や最大の危機に立つソ聯の政治、經濟、外交、軍事の諸部門に亙つて一應の檢討の筆を終へたのである。

そして結局に於いてソ聯の政策といふものは常に現實の必要に卽して容易に變轉し、このためには實際はイデオローギ等には一切囚はれぬのであり、從つてその政策には何時も裏の裏があり、潛在してゐることを知るのである。

この故にその示向を把握するためには表面の事實のみを以てしては常に失敗することを忘れてはならぬ。

現に今や幾多の背反面を包藏しつゝも米英ソはその必要觀から同床異夢的合作を行ひ、一應表面的には協力してゐるが、今後戰局の進展によつては、その相剋面の激化を招來することも豫想されるところであり、現段階に於ては僅に米英ソの首腦者が意識的にその露呈を蓋はんとして躍氣にその調整を行つてゐるの情態である

從て不俱戴天の仇といふも過言ではない相互の憎しみの情がやがては何等かの機會に爆發し、その不自然な姿を解消して自然の對立の地位に立つであらうことも豫想されるのである。

然もこれらの動機となるものは懸つて戰局の推移如何にあることは多言を要せぬのである。

對日協調の基調

一方また今後敗戰段階の深化に伴ひ將來ソ聯の對日態度にも將來幾多の變化は來すであらうが、然しこれによつて帝國の態度は微動だになきは當然である。

然してソ聯が眞に世界平和を希求し、その存立を維持せんとせばその國是にも等しい謀略に滿ち、僞瞞と猜疑に終始する米英との不自然な合作をこの際放棄して米英による利用の愚を改め歐洲の新情勢を再識認すると同時に、東亞に於

そして來るべき米國側の北太平洋方面よりの對日ゲリラ戰時的蠢動期に際して、ソ聯の動向は如何なる進展と變化を示すであらうか？

世界を擧げて渦亂の中に包まれるに至つた現段階に於て右するも左するも、これはスターリンの自由であるが、その何れかを選擇することによりソ聯は永遠に史上から抹殺される危機に瀕してゐるのである。

然も現實に於ては好むと好まざるにかゝはらずソ聯がその二者擇一の措置に出ねばならぬこは今や時間の問題となつてゐるのである。

戰渦の試錬は斷じて中間的曖昧な態度の持續を許さぬであらう。戰火による嚴しい現實は今やソ聯に最後的決意を促してゐるのである。

校了後記

脱稿後校了迄約一年を經たので、この間に國際情勢も猫の眼の如く、變轉しソ聯も幾多の表面上の變化を遂げた。

然してこれら大部分の點はかく變化すべしとして大體本文中に於て示唆した事であつて、著者としても今その適中せる正確な推理と結果をみて非常に欣快とし、自信を强めた所であるが、なほ脱稿後一年間に於て生成起伏せる主なる出來事に對し、最新の正確な資料によつて更に一應の解明を試むべきを著者の務めと思ふので敢て煩雜をも省みず以下附記する。

▽先づ第二回目の冬の陣に於けるソ聯の抗戰であるが、前年の冬期反擊戰で苦盃を嘗めた獨逸は一九四二年の冬を迎え、越冬のため萬全を策したのではつた。

然し獨軍の千慮の一失とも云ふべきスターリングラード完全攻略を果し得なかつたゝめこの地點を反抗の據點として一九四二年十一月十九日に至つて赤軍は俄然猛反擊に出て、遂に同方面に於ける樞軸軍約二十萬を包圍殲滅すると共に北、中、南部の全東部戰線に亘つて一齊に所謂スターリン總反抗戰を展開し、その勢物凄く特に南露地域に於てはロストフの奪還に成功し、更に一時はハリコフをも奪取し多大の成功を收め得たのであつた。

今次反抗の特徴を擧げれば次の如きものがある。

イ、緒戰に於ける甚大な物的、人的打擊を漸く挽回し、物的方面に於てはウラル地區に强大な抗戰力培養のための產業地帶の建設を完了したこと

ロ、國內決戰態勢の强化によつて最大限の動員を完了し、戰時產業組織の再編成に成功したこと

ニ、米英等の與國と事前に充分の連絡を計り、米英による北阿戰の展開に併行して、東部戰線でも攻勢に轉じたこと

ホ、今次反抗戰は開戰以來充分に準備してゐたものであり、その人的物的部門に於ては豫め最大の用意を行つてゐた。

即ち一九四二年夏の陣に際しては前年の如く徒に獨軍の攻擊に對して抵抗するを止め、その主力の決戰は極力回避して、獨軍の意圖

した殲滅決戰に引きかゝり主力の大損耗を招くが如き愚を避け（獨軍も亦第二次夏の陣の目標は資源獲得戰であつて前年の如く赤軍野戰軍の殲滅は從とした）專ら獨軍を奥地へ誘導し、嚴冬到來と云ふ自然的條件の至ると共にその全主力を擧げて獨軍の延び切つた戰線の虚を衝いて反擊に出たこと（このためスターリングラードの確保は反攻の據點として、どうしても戰略上必要であつた）

へ、從て自力による全面作戰に轉じ得るため總餘力は完全に動員され、全智能また結集され、凡ゆる犧牲も省みられなかつた。特に反抗開始前に凡ゆる不利を忍んで思ひ切つて前戰司令官の全面的更迭を斷行し、これと共に、全軍は專ら冬期機動戰に備へて萬全の訓練と準備を行つた點は極はめて示唆に富むものがある。

以上の如く昨年の失敗に懲み自國の物的、人的資源と睨らみ合はせて從來の專守防衛戰を一擲し、こゝに戰史上特筆すべき乾坤一擲の最も大膽な獨軍野戰軍の一大殲滅戰を敢行したのである。

さて今次反抗戰の意義であるが、それは次の如きものが列擧出來る。

一、相次ぐ敗戰は國内的にも漸くスターリン政權に取りマイナスとなるべき空氣を醸成する可能を生ずると共に、對外的には米英その他の輿國に對し、これを同盟國として引き付けて置くためにもこの際ソ聯の餘力を誇示する必要に迫られたことゝ、この際獨逸を擊破して戰後歐洲に於ける絶對的發言權を確得して置かねばならなかつたこと

一、南歐一帶の資源地帶はソ聯に取つて依然最大な抗戰力の支柱であり、これを獨軍の手に委せることは獨軍を愈よ强大ならしむる可能性があること

等であつたが、この結果はソ聯自が認めてゐるが如く、廣大な地域の奪還成功に比し、獨軍に與へた人的損害は豫想に反し極はめて鮮少であり、僅にスターリングラード周邊に於て獨第六軍を撃破したに止り、却て自國の損害は百五十萬に上る結果を示した。

▽次に開戰以來の損害をみると次の如くなつてゐる。

即ち一九四三年二月二十三日獨軍側の發表による過去一年八ヶ月間に於ける戰果は次の如くである。

戰死傷	一二八〇萬	俘虜	五四〇萬
各種火砲	四八千門	戰車	三四千臺

なほ同様獨軍側公表による昨年十一月二十日より、本年三月二十日に至る所謂冬の陣に於てのソ聯側の損害は兵力に於て百五十萬以上、戰車一萬一千九百五十八臺、飛行機三千七百六十三機となつてゐる。（ソ聯の軍要生産力を注目せよ）

これに對し獨軍側の損害も相等に上つてゐる事は云ふ迄もあるまいが、これに對處して獨逸は歐洲二億の人口を再編成し人的戰力の萬全を期した事は一九四三年二月二十四日ミュンヘン黨本部に於けるヒトラー總統の歴史的演說に徵しても明瞭であり（黨領袖エッサー代讀）事實既に沿バルト三國人による特殊部隊や露人部隊が組織され一部對ソ戰線に出動してゐると云はれ、更に同年四月末より、五月に至る間に於てヒトラー、ムソリーニ會談に次ぐヒトラー、ラバール會談等一聯の歐洲諸國首腦部とヒトラー總統との會談は獨軍の問然するところなき對戰萬全策として注目されるところである。

▽次に米英、ソ關係であるが、ステチニアス米武器貸與局長官が一九四三年二月二十日議會に報告したところによると、過去一ヶ年間に於ける米國の對英、ソ、重慶及び英自治領及び植民地に貸與した物資は次の如くであり、米國が〃聯合國側の兵器庫〃と宣傳しつゝも事實は自國の戰備に吸々として對外武器補給が宣傳的の域を脱せぬ事を明としてゐる

（單位百萬ドル）

軍要品	一七七二	工業品	九一六	農産物	一〇九三
英自治領及び植民地向け（金額にして三九五九百萬ドル）					
軍要品	一四二一	工業製品	三六九	農産物	七一
ソ聯向け（金額にして一五三二百萬ドル）					
軍要品	九一二	工業製品	二四七	農産物	一〇二
重慶向け（金額にして一五六百萬ドル）					
軍要品	一〇五	工業製品	二一	農産物及び勞務奉仕	三〇
勞務奉仕	七八〇	このうち			
勞務奉仕	五三二				
勞務奉仕	二七一				

なほこの際ステチニアスの言によれば、同法實施以來昨年末迄對ソ供給の物資は軍用機二千六百機、戰車三千五百臺、トラックその他軍用車輛大砲等八萬一千臺と云はれる。

（米側の對外軍用物資總供給量は米全生産量の一二―二五％前後と云はれ米國の利己的な性格をこの點にも如實に暴露してゐる）

註＝武器貸與法案（正式には米國々防促進法案）は一九四一年三月十一日議會によつて承認され、その狙ひは次のものである。

校了後記

イ　米國の參戰を延引せんとす
ロ　民主々義國家群の戰爭指導權掌握
ハ　戰後に於ける世界制覇

なほ同法豫算として現在まで議會によつて承認された金額は五八一億八千萬ドル（このうち陸海軍關係豫算として計上され武器貸與費に流用されるものを含む）の巨大な額に達してゐるにもかゝはらず、同法實施以來昨年末迄の援助實績は僅に八十二億五千萬ドル程度である。なほ現段階に於ける米英、ソ關係に關しては善隣協會刊行の拙著〃米英、ソの相剋〃を參照されたい。

▽北阿戰終了と前後する一九四三年五月十一日チャーチルは陸海空軍將領を引き具してワシントンに到着し二十九日閉幕迄の約二週間に亙る米英巨頭第五次會談に於ては宋子文、宋美齡及びリトウイノフ等の他、濠・加及び歐洲亡命諸國代表も加えて協議したものであるが、これに於てチャーチルが對ソ援助（北阿戰終了に絡み歐洲上陸戰の敢行）に藉口し對獨打倒を主張したのに對し、帝國の脅威を漸く身近く感するに至つた米國は重慶援助による對日進攻戰を今後の主要作戰として固持し、米・重慶對英・ソの對立を示し、こゝに聯合國陣營の主要作戰面に對する見解の背馳を暴露した。

註＝チャーチル、ルーズベルト會談に次いで行はれた反樞軸食糧會議に於て米國首席代表エーチソンが戰後食糧問題と對ソ援助問題は別個に討議すべきを主張せるに對し、ソ聯側は對ソ食糧供給は既に審議の期間を經過して居るとして赤軍並に一般ソ聯國民に即時食糧供給を要求し、會議は混亂に陷つた。

かくて結論としては何事も米側に追隨する以外方策なき英國は遂に米國の要求を容れ、近き將來に於ける米國の提案による米、英、ソ三國巨頭會談の開催及びこの結果ソ聯を對日戰線に誘引し、大平洋戰局に重點をおく戰略方針の實踐に決した模樣であり、このため、ルーズベルトの特使は大統領の親書を持ち直ちにモスクワに向ひ、チャーチルも今次米英會談の結果を報告のため一應歸國の上更にモスクワに向ふものとみられてゐる。

かくてルの特使デヴイスは既にモスクワに於けるスターリンとの會談を遂げ歸國したが、今次米、ソ兩首腦者間に交換された主要課題は大體次の如きものと想像される。

即ち中立國筋の觀測によれば、極はめて近き將來に於けるスターリンとの會見を求めると共に

イ、全歐洲地域に於けるスターリンの自由活動權の賦與（これに對し英國の眞意は不賛成とみられる）
ロ、ソ聯に對する國際情勢緩和のためコムミンテルンの解散
ハ、第二戰線結成を條件にソ聯の對日戰線參加（沿海洲その他の基地讓渡の要求）

以上の如きものとみられる。

註＝なほこれに反し一九四三年春以來米英、ソ間に漸次激化せんとしつゝある問題は次のものがあつた。
イ、北阿傀儡政權問題に於て米英がダルランを擁立したのに對しソ聯は反對した（ソはド・ゴールを支持し米・英はジローを支持す）
ロ、カサブランカ會談にソ聯不參加
ハ、ソ聯の第二次冬の陣に於ける强大な反抗力に米英共或種の疑念と恐怖心を表現し、かくてチャーチルがトルコを訪問アダナ會談に於て對ソ案に付き協議した
ニ、米英がフインランドの對ソ單獨媾和說を宣傳したのに反しソ聯が否定した
ホ、英國の支持を受けてゐるユーゴの叛將ミハイロウイツチがイタリーと策謀した事に關するソ聯の抗議
ヘ、ソ聯のヘスの斷罪要求
ト、ソ聯が汎スラブ主義を宣傳强調しバルカンへの野心を明確化した
チ、ソ聯の舊ポーランド問題に對し米英がポーランドの側に立つた事
リ、ソ聯が大西洋憲章を全く蹂躪し戰後バルト三國に對する宗主權の掌握を明にした事
ヌ、駐ソ米大使たるスタンドレーの反ソ聲明
ル、ウオーレス米副大統領の言明
ヲ、更に以上が歐洲第二戰線問題と絡み、相互に原因と結果を生んでその相剋を激化せんとした。

等の諸點であるが、更に本年四月末獨逸がスモレンスク地區の〃カチン〃の森に於てソ聯の仕業と認められるポーランド將校一萬餘人の虐殺事件を明とに及び、遂に從來極はめて險惡な關係下にあつたソ、波關係は破局に立ち、國交は斷絶となつた。

かくして今次大戰によつて既に滅亡せる亡命政權を飽く迄支持し、これに戰後の保證を與へると云ふ美名の下に、米英が世界制覇の

校了後記

野望を法文化せる所謂大西洋憲章によれば、今次ソ聯の對波措置は勿論排撃すべき性質のものであるが、今ポーランド、オランダ、その他一聯の亡命諸國の支持のため有力なる味方ソ聯を失ふ事は今や米英に取つては正に致命的打撃となるに及び、遂に米英は自らデッチ上げ、金科玉條としに大西洋憲章に目を蓋つて、シコルスキー亡命波政權を强壓し、專らソ聯を慰撫して一應ソ、波の對立を有耶無耶のうちに葬らんとし、この結果今やソ聯の擁立せる赤色波蘭政權と、米英の支援する新波蘭政權の別個な二政權が生れんとする奇現象を呈してゐるのである（シコルスキーは過般飛行機事故により死亡したと云はれるが、事實は米英のため暗殺された事は餘りにも明である）

こゝに米英の利己的御都合さが遺憾なく露はれると共に、米英、ソの對立の一段の深刻化が指摘される

▽一九四三年五月二十一日モスクワ報道は第一インターがその使命達成によつて解散されたと同樣に今回第三インターも解散するに至つた旨發表した。

かくてその眞相は第三インターの活動も今次の峻烈なる戰爭の樣相は、必然的に自國本意の色彩を濃化するに至り、事實その額面通りのインターナショナリズムを以てしては矛盾のみ多く、今後戰爭繼續に多大の支障を來しつゝある事は否めぬが、然しその解散の眞の狙ひは次の諸點にあるものとみられる。

イ、ソ聯が今次對獨戰を完遂するためには從來の人爲的なイデオロギーに捉はれてゐては抗戰不可能となつた事

ロ、從てこの際國内的には祖國愛、祖國防衛のための民族主義に訴えてその戰意を愈よ昂揚せねばならぬと共に、國際的にも諸種の危機回避のためにもその對外政策はこの際對米英協調は絶對に要請されるに至つた。このため米英その他の輿國と眞に提携を密にするためには一枚看板たる第三インターが將來癌となるため、この際この解消を斷行した事

ハ、既に戰亂のため事實上開催不可能の現段階に於て、第三インターの解散は何等の實際的支障も伴はぬと共に、表面解消しても眞の第三インター的使命を有する各國の共產黨は夫々依然ソ聯と密接な提携に於て存在してをり（モツプの存在の如き）〇〇主義宣傳或は又ソ聯の企圖する〇〇主義的〇〇政策遂行上には些の支障もなき事

等が指摘されるのであつて、結局今次第三インター解散の非常措置はスターリン一流の名を捨て實を取つた大膽な現實政策であり、大戰の相貌愈よ深刻化せる今回の政局に對處し、同盟國又はその輿國のみならず、敵國陣營に對しても强大な宣傳的効果を狙つた〇〇として把握せねばならず、從て飽く迄も自國の危機回避のための一策であり、むしろこれにより、第三國に或種の〇〇を與へその〇〇を衝き却て〇〇〇〇の潛勢力を擴大せんとしたものである。

正にスターリン的措置であると共に、奥の手を出したソ聯の動向には更に深甚の注目を必要とするのである。重ねて今次解散によつては事實上の第三インターも更にソ聯の共產主義的世界政策も何等の變化なきを銘記すべきである。

然して今次措置によつてソ聯が米英との提携に一段と積極性を示した事は特に注目されるところであり、傳へられるルーズベルト、スターリン會談開催の有無は兎も角として、米英と共に今後ソ聯の對日對度の變更こそ一億最大の關心事でなければならぬ。大戰の深刻なる影響は正に生き殘るか滅亡かの二者何れかであり、イデオロギー的未節な問題等はこの嚴肅な戰爭の前には泡沫と解消さるべきものであり區々片々たる感情の如きは既に現實的なチャーチル、スターリン、ルーズベルトの如き指導者には一顧も價せぬのである。

彼等は今やその好むと好まざるに關はらずその全力を擧げ相互援助を强化し一意樞軸打倒の一點に全能力を傾注せんとしてゐるのである。かゝる段階に於て假りにも米英ソ陣營の分裂と云ふが如き甘夢や自慰的觀測に陷つてはならぬ。否むしろ彼等は顯在乃至潛在的兩樣の幾多の矛盾と對立面を克服してます〳〵强化されんとしてゐる嚴しい現實を直視せねばならぬ。

とまれ、スターリンの今次〇〇的措置も、彼が米英との一連托生につき或程度の決意を示唆したところに注目せねばならぬ。

▽ソ聯では從來政治とは經濟の上に樹てられたその集中的表現として把握され、從て政治の基調たる經濟の優位性が强調されてゐた。然し今次大戰の結果はソウエート政治力の强化によつて連敗の結果による經濟面の缺陷を補はんとする著しい傾向を示し、このためスターリン政權强化のため最近矢繼ぎ早やに幾多の劃紀的措置が講ぜられた。

かくてこの結果一見政治が經濟に對し優位性を占めてゐるかの如く見做されるに至つたのであるが、實際は前述の如くスターリン政權の基調である經濟分野の脆弱化による動搖を防止せんとしての政治部門の强化であり、强力な政治力によつてその基底をなす經濟力の崩壞を躍氣に防止せんとしてゐるのが現段階に於けるソ聯の眞相である。

從て今後更に連敗を喫するに於ては經濟力の破綻は激化し、例へ政治力の强權發動によつても到底これが防止が不能となれば例へ政治的分野に於てなほ表面上一應の强觀さを誇つてもその〇〇は不可避であるのである。

こゝにスターリン政權の〇〇〇の一面が指摘されよう。

▽赤色空軍の現勢について左記に述べよう

校了後記

現有機數　約一五、〇〇〇内外（練習機を含む）
（月産　約一、二〇〇―一、五〇〇）
極東空軍はこのうち　二、五〇〇機内外
更にその機種別は

輸送機（襲撃機）	四九％
爆撃機	二八％
偵察機	四、二％
練習機及び輸送機	一三％
水上機	四、二％
雑用機	一、六％

以て赤色空軍の示向の一端が窺はれる。
また代表的機種は次の如し

戦闘機

イ、一七（型ツエカ・ペ十九型）単座単発機、最大時速　三一〇マイル、装備　魂　一門、機關銃　四門
デ、イ六型（復座）　最大時速　二四〇マイル、装備　機銃　六門
クラスナヤ、スヒットファイヤ（単座）　最大時速　三五〇マイル、装備　機銃　若干

爆撃機

テ、ベ、六バ型（アント四一型）（重爆）　最大時速　二三〇マイル、爆弾搭載量　六、〇〇〇ポンド

次にその質的向上をみれば次の如し

戦闘機	一九一八年	一九三九年	一九四二年
時速	二〇〇粁	五四〇粁	六五〇粁

機種	重量	爆弾搭載量	上昇限度	機銃	機関銃
戦闘機	一九一八年	一九三九年	一九四二年	二門	魂四、機六
戦闘機	一九三九年	一九三九年	一三、〇〇〇米	四門	魂四、機六
戦闘機	二〇〇馬力	一、〇〇〇	二、〇〇〇		
爆撃機	一四〇粁	三五〇	四五〇		
爆撃機	一、〇〇〇瓩	四、〇〇〇	六、〇〇〇		
爆撃機	一、〇〇〇粁	四、〇〇〇	六、〇〇〇		
偵察機	三、〇〇〇米	七、〇〇〇	一〇、〇〇〇		
偵察機	四基	四基	四基		
偵察機	一〇〇馬力	八〇〇	一、六〇〇		

ペ・二型急降下爆撃機性能

発動機　一、〇〇〇馬力二基（空冷）、翼巾　一八米、全長　一四米、最大時速　五五〇粁、上昇限度　一〇、〇〇〇米、爆弾搭載量　五〇〇瓩、航続距離　一、八〇〇粁以上

航空工業部門は次の如し

飛行機製作工場	約	八五
同　修理工場	約	三〇
航空発動機工場	約	一七
附属品工場	約	三五
従業員総数	約	六〇萬
航空技師		四〇〇

なほ人的要素培養機關としては現在五〇〇ヶ中隊以上、航空旅團六九―七〇ヶ旅團、空軍將官一三〇名以上、航空指揮官學校三二校

校了後記

及びアツアピアヒム直屬飛行學校六五校以上の他全國に飛行專門學校多數。

▽コムミサールの復活と廢止

一九四〇年八月十二日統帥の一元化の見地から廢止され、こゝに赤軍の特長であり、弱點とされた癌は一度除去されたが、翌四一年七月十六日附でまた復活され（獨ソ戰の緒戰に於ける大敗北の結果、反ソ氣運抑壓のため）翌四二年十月十日また廢止された（赤軍スターリンから離反せずの確信を得たゝめと大反攻戰展開のため指揮の單一化が必至となつたのである）その意義を見ると赤軍の指揮權が强化されて廢止されたコムミサールが四一年復活の理由は戰鬪命令の無條件遵奉と軍紀確保の見地から一切の反逆行爲の撲滅のためと云はれ、四二年更に廢止の原因はスターリン獨裁が確立し如何なる外部よりの壓力によつても反ソ氣運の擡頭は絶無の見通しが付いたゝめ、及び大戰爭の前には人爲的イデオローギ卽ち共産主義思潮及び組織は全くその權威を低下し、戰時意識昂揚の方途としては民族主義乃至は愛國主義が絶對となつたゝめ黨本位のコムミサールの退陣となつた。これを要するに戰前軍備の充實を豪語し戰意の昂揚を策して廢止し、開戰後再び敗戰にある赤軍の危機を憂えてその崩落壞潰を防止せんとして復活し（この頃スターリンも赤軍に對し或種の不安を感じた事が證明される）その後決戰的大反攻に轉ずるに際し戰意昂揚のために復活した。從てこの時はスターリンは自己の獨裁權の强烈さに自信を取り戻すと共に、赤軍に絶對の信頼を始めて表示したものである。以てスターリンの示向と國内情勢の變動が窺はれる。なほザポロジエツツ元赤軍中央政治局長の言明によれば一九四一年徵集者の素質左の如し。

中等教育以上（中退を含む）三五・五％。最低教育を終了せるものは僅に九・二％。また補充兵中コモソモール出身者は四七・三％と云はれ、前述の如き軍事委員制度廢止の有無にかゝはらず覺勢力の强大さを示してゐる。

次に受勳者かみる赤軍の民族組織は次の如く示唆に富む結果を示してゐる。卽ち開戰以來一九四二年十月五日迄のソ聯側發表の總受勳者數は十八萬五千百十三名である。

民族別	受勳者數	百分率（人口百分率％）
ロシア	一二八、七三二	六九・五九（一六・四一）
白ロシア	五、四一一	二・九二（三・一一）
タタール	二、八八三	一・五五（二・五四）
ウクライナ	三三、一九一	一七・九四（三・一一）
ユダヤ	五、一六三	二・六九（一・七八）
モルドワ	一、一一六	〇・六〇（一・八六）

民族別	受勳者數	百分率（人口百分率％）
カザツク	一、〇三五	〇・五六（一・八三）
アルメニア	九一三	〇・四九（一・二七）
バシキール	四五一	〇・二四（〇・五〇）
カレリア	三九一	〇・二一（〇・一五）
オセチア	三三八	〇・一八（〇・二一）
コミ	二〇五	〇・一三（〇・二四）
ポーランド	二三〇	〇・一二（〇・三七）
モルダビア	一五〇	〇・〇八（〇・一五）
ギリシヤ	九八	〇・〇五（〇・一七）
キルギフ	八四	〇・〇四（〇・五二）
カルムイク	七一	〇・〇四（〇・〇八）
トルクメン	五九	〇・〇三（〇・四八）
チエチエン	四四	〇・〇三（〇・二五）
カラチヤイ	三一	〇・〇二（〇・〇四）
アバール	二七	〇・〇二
ハカツス	二五	〇・〇二（〇・〇三）
ヤクート	一七	〇・〇一
クムイク	一四	〇・〇一
イングーウシ	一〇	〇・〇一（〇・〇五）
カラ・カルパク	八	〇・〇一（〇・一一）
ウイグル	六	〇・〇一
グルジア	九七六	〇・五二（一・三三）
ラトビア	四八八	〇・一六（〇・〇七）
ウズベック	四一九	〇・二二（二・八六）
チユリシ	三六三	〇・一九（〇・八一）
アゼルバイジヤン	三〇二	〇・一七（〇・三三）
ウドムウルト	二三六	〇・一二（〇・三六）
マリー	二三〇	〇・一二（〇・二六）
ブリヤート	一三二	〇・〇七（〇・一九）
カレロ・フイン	九三	〇・〇五（〇・〇八）
カバルダン	七三	〇・〇四（〇・一〇）
タタツク	六九	〇・〇三（〇・七二）
アドウイゲイ	四九	〇・〇三（〇・〇五）
ブルガリア	三三	〇・〇二（〇・〇七）
アブハジヤ	二八	〇・〇二（〇・〇三）
リトワニヤ	二五	〇・〇二（〇・〇二）
アルタイ	一八	〇・〇一
ダゲスタン	一四	〇・〇一
ポヘミヤ	一四	〇・〇一
スペイン	九	〇・〇一
アツシリア	七	〇・〇一（〇・〇一）
その他一九民族	二〇一	

終了後記

▽獨ソ開戰二週年の一九四三年六月二十二日獨ソ兩國は夫々次の如く赤軍の損害を發表してゐる。

ソ聯情報局發表

戰死行方不明合して四百二十萬

獨軍當局の反駁發表

捕虜　五三六萬五千

火砲　五萬門

飛行機　四萬機

に達し戰死傷捕虜を合すれば赤軍の損害は既に二千萬を突破し、獨軍の占領面積は英本土の四倍に達してゐる。

▽北阿戰局終了の見通しついた一九四三年四月十一日から二十五日迄に亘つて行はれたチャーチルの訪米に伴ふ所謂米英巨頭會談に於ての主要議題の一は大平洋戰局であり、更にソ聯をこの方面への誘引であつた。

然して當時チャーチルは近くルーズベルト・チャーチル・スターリン會談と云ふ米英側に取つては懸案の會議が開催されんとしてゐる旨示唆的聲明を發したが、最近米英側の報道は既に右米英ソ會談の開催に關しスターリンの許諾を得て愈よ近く實現する旨報じてゐる。

右に關しハンブルガー・フレムテンブラット紙のベルリン支局長アドルフ・ハルフェルト博士はルーズベルトがスターリンとの會見を焦燥してゐる事實を指摘しその理由として次の如く述べてゐる。

即ち

米國は今や劇甚にして高價な犧牲の伴ふ對日戰爭の將來に不安と焦燥を禁じ得ず、この際ソ聯を東亞戰線に引き込む以外その前途に如何なる希望も持ち得なくなつた。

と述べ太平洋戰局の頽勢挽回のためソ聯の犧牲を要求してゐると急所を衝いてゐる。

かゝる米側の企圖は炯眼なスターリンは看破せざる筈はなく、このため從來凡ゆる好餌と威嚇を以てする米英の誘引にも極力消極的態度を以てこれを拒否し、米英主腦との會談を避けて來た。

然るに若し今度米英の首腦部と會見する事ありとせば、スターリンの心境の變化を來した事は明であり、この結果〇〇政策特に對〇動向に重大變化が齎らさるる可能性があり、さきに第三インターを解消したソ聯が更に今次米英の申入れを承諾してル大統領及びチ首相と會談を決意したとせば、ソ聯の對米英接近も愈々本格化したものとして把握せねばならず〇〇戰局への影響も蓋し甚大なるものありと云はねばなるまい。

とまれ從來歐洲戰局に限定して米英との協力を希求し、新な戰線への介入は絶對回避せんとしてゐたスターリンが米英ソ會談に出席したと假定するならスターリン一流の〇〇として警戒せねばならず、今後ソ聯の〇〇方面への示向こそ最も注目されよう。

▽アパナセンコ大將に代る極東正面軍司令官ブルカーエフ大將(元駐獨武官)着任(一九四三年六月)

▽獨軍の飽く迄主動性に基因する放膽なる撤收作戰の結果はソ聯の對米英態度にも必然的に變化を來し、ソ聯は從來の米英のために一方的犧牲に甘んじてゐた地位の改善に乘り出し、著しく孤立主義色を呈するに至つた。

即ち東部戰線から獨軍を五〇—六十ケ師引きさくに足る新な戰線を西歐へ速時開設せよとの對米英强硬要求を行ひ、これ以外には第二戰線と名付くべきものなしとの意向を强く示し、從て伊本土或はバルカン作戰は所謂第二戰線と認め難しとなし、却て米英の對伊、バルカン及び西亞方面への作戰開始に不滿の意を表してゐる。

一方所謂米英側のアイゴットへの强引な參加を行ひ、地中海委員會へも既に加盟し全歐洲地域に對する政治的發言權の確保をもつてゐる、特に米英が、バルカン、西亞への武力進出を企圖してゐるのに反しソ聯は老練な政治家をこの方面に派遣し飽く迄政治的進出を企圖してゐる點は注目される。

▽かくして佛傀儡政權は米英に先んじて逸早くソ聯によつて承認され正式外交關係も樹立され(ボゴモフ全權大使に任名)また埃、ソ外交關係も軌道に乘り(ニコライ、ノウイコフ駐埃公使に任命)地中海北阿への布石を了し、更にバルカンのパルチザン隊首領チトー及びミハイロウイッチとの提携も成り汎スフウイハムの見地からこの方面への布陣も終へたのである、かくて歐洲方面に關する限り戰局は最終段階たるバルカン爭奪戰に移行せんとする趨勢に機先を制して米英より早くこの方面へのソ聯の發言權を獲得したのである。

他方西亞、印度へのソ聯の關心も漸く明確化し、米英、ソの相剋またこの故に必然的に增大し、米英の苦悶を暴露してゐる。

▽米英の對ソ態度もかくて必然的に猜疑心を激化し特に次の諸點を指摘して米英紙は早くも對ソ警戒說を揭げてゐる。

イ、ソ聯が對米五百億ドルの借款を要求し、これによつて專ら工作機具の輸入を企圖してゐること
ロ、北歐（特にバルト三國の宗教權要求）バルカン、西亞への獨自の政策固執
ハ、インターナショナルを一應表面的に引き込め、これに代り舊スラウイズムを昂揚してゐること
ニ、國家インターナショナルを廢して新らしいスラブ主義的國家を作制
ホ、宗教の復活
ヘ、軍人の大量叙勳に對し、今度はモーロフ、ベリア、ミコヤン等純黨員を戰時生產功勞者として最高叙勳し、軍人と黨員の併行を行つた點は、黨員の優位性を示唆したものであり、前記の工作機械の大量輸入等諸政策と共にソ聯が國內再建に乘り出さんとしてゐることは注目される。以上一聯の注目すべき內外政策はソ聯が米英のため火中の栗を拾ふの從來の立場を一掃せんとする態度の前提として米英を早くも狼狽せしめてをり傳へられる獨ソ、獨英和平說またこゝに發し米英又はソ聯の相手方を牽制せんとする謀畧宣傳に過ぎぬのである。

とまれ歐洲戰局の樣相は漸次政治的性格を多分に示すと共に、こゝに米英ソの動向にも變調を招來し、米英の對ソ態度は頓に微妙なものとなつたのである。

かくて米英の深刻なる苦悶またこゝに指摘される。

頁組違ひのため、二一四頁より二二四頁に十頁飛んで印刷してありますが、これは全く印刷所の手違ひにて內容には聊かの變更も無之ことをお斷はりし、玆に各位の御諒恕を希ふ次第である。

ソ聯の總力戰研究

定價金六圓
特別行賀稅相當額二十二錢 合計六圓二十八錢

櫻木書房

出版會承認 あ440262號・3000部

昭和十八年十月二十五日 印刷
昭和十八年十月三十日 發行

著者 橘川萬那不（キツカワ マナブ）
東京都下谷區上野櫻木町二番地
發行者 二方久
東京都麴町區有樂町二丁目九番地
印刷所 三勇舍印刷所（東京・一〇）
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社
東京都下谷區上野櫻木町二番地
發行所 有限會社 櫻木書房
出版會登錄會員番號第一一一五二一號
電話根岸(37)四六八七番
振替東京五二〇七番

978
65

賣價(税込)¥6.28